

海外から見た日本と、日本で役立てることのできる教育活動の調査

～国際社会での日本の位置、これからの可能性について～

前在日本国大使館付属マニラ日本人学校 教諭

北海道北見市立相内小学校 教諭 吉村 雅彦

キーワード：現地理解、英語教育、施設運営、現地での日本理解

1. はじめに

日本から飛行機で約4時間で行くことのできるフィリピンは、植民地政策の名残もあり、世界で3番目に英語を話す国民の多い国である。多くの国民が外国での就労を夢見て、海外との交流が活発に行われ、口コミによる多くの海外情報が入手できる国である。数多くの島といくつもの部族や言語が存在するこの国では統一された文化はなく、部族ごとの文化や、海外からの文化が交流しあい、人々の生活を成形してきた。日本との関係も深い。

今、日本では少子化で人々の平均年齢が高くなるなか、個々の価値観が多様化し、その中でこれから更なる国際化を経ていかなければならない現状がある。日本独自の文化を守りながら、他国の文化と交流しあうにはどうしたらよいのか。どのように人材を育み、学校は保護者と共に歩んでいけばよいか。このような考えのもとに調査研究を行い、これからの方向性を模索した。

2. 英語教育の可能性と問題点について

日本でも急激に国際化が進むなか、日本人の英語語学能力の必要性は今まで以上に高くなってきている。小学校に英語教育を導入する議論が高まり、加速するのも最もである。ここフィリピンでは公用語（フィリピン語）のほか、ほとんどの場所で英語が使用でき、多くの人々が英語を話す。このことを利用し、海外で給料のより高額な仕事につくことができる可能性も高くなる。この国で、英語は日本以上に身近なものとして人々の生活の中にある。日本人学校に入学する小学校新1年生は、現地の幼稚園で英語を経験しているものが多く、入学段階で英語の基本的な会話ができる児童が非常に多い。

このことを踏まえ、日本人学校入学前に、どのようにして彼等は英会話力を高めることができるのか、入学してくる子どもが多い現地の幼稚園を視察し、園長と話をする機会を作った。また、マニラ日本人学校における英語教育の現状と、入学してからの問題点などもまとめてみた。

首都マニラ市内の幼稚園を視察したとき、園児は全て英語で生活しており、保育士たちも全て英語で会話していた。園長の説明では、最初日本から来たばかり子どもは英語がまったく解らないため、1週間程度はグループに溶け込めず一人で様子を見ているケースが多い。しかし、次第に園内の環境に溶け込んでくると、1ヶ月後には英語で簡単な会話ができるようになるということであった。保育士は絵や掲示物を多く用い、それを巧みに使いながら園

児への指導を行っていた。最初、英語が分からない園児たちも絵からいろいろ想像して、会話の輪に入るようになっていく様子を視察を通してとらえることができた。文字の書き方や単語の指導はほとんど行わず、教えるというよりは自然に耳になじんでいくという指導方法をとっていた。園長によると、会話習得は勉強という意識を持つ前の、歳が早ければ早いほどよく、英語を使用する環境の中にいるだけで自然と身につくものという話であった。興味深かったのは、他の多くの幼稚園でも、母国語より先に英語の会話練習に重点を置いている幼稚園がいくつもあるということであった。

海外での就労者が多いこの現状や、世界の中での英語の必要性を十分に理解していること、昔アメリカの植民地支配を受けたことが、このような教育をしている理由として挙げられる。このように英会話の基礎は、幼稚園においてできることが多いようだ。そのことを基礎として、中学校になるとほとんどの生徒が高度な英会話能力を持つようになっている。ダバオで視察した日系人学校も英語の授業中は全て英語だけで、休み時間もフィリピン語と同様に英語で生徒たちが会話していた。

全体的にみて、会話に重点を置いて幼い頃から英語を学習しているフィリピンの方が、現在の日本人の英会話能力から比べ遙かに高い力を身につけている。

3. 問題点として

上記にあげた子どもたちは、確かに英会話の能力は高いが、書いたり読んだりすることは必ずしも十分とはいえない場合がある。これは日本人学校に通う中学生にもいえることで、こちらでの生活が長く、日常英会話力が十分な生徒でも筆記に間違いが多く、学校での英語のテストがなかなか100点になりにくいという実情もある。

マニラ日本人学校では、小学校から中学校まで各教科における学力の伸長を測るために学力テストと学習についての意識調査を3年間続けて実施してきた。そしてそのデータを基にいろいろな角度から学力について検討してきた。母国語である日本語が、発達段階において各学年で十分に理解できていないと、日本語で理解したり考えたり整理する力が十分に働かない場合がおこり、学力を深める上で大きな障害となりうることでデータをもとにして明らかになった。

今後、日本でも英語学習は低年齢化してくるであろうが、それと同時に学力全体の向上には日本語で理解・思考できる力の充実が必要で、この力無しには学力の伸長はとても難しいものになっていくのではないかと推測する。

4. 学校の授業時間外における施設運営について

学校施設の放課後活用について、日本ではいろいろな取り組みが教育現場で行われてきた。特に中学校では放課後のクラブ活動・小学校では学童保育、休日等の地域社会への学校開放などが大きなものだろう。しかし指導員の高齢化や施設の維持管理・運営問題など、その活用方法においてのみならず、保全・安全の面からも考慮が必要で、いろいろな面に置いて転換期にさしかかっているようである。これから先、日本においては、どの様な(学校などの)公共施設の使用方法がよいのであろうか。1つのケースとしてフィリピンで行われてい

る取り組みを調査した。

フィリピンでは、日本と違い、生徒の割合に対して圧倒的に教育施設の数がない。公立の小中学校では、1日の授業を3交代制にして児童生徒へ授業を行っている。したがって朝暗いうちから、夜遅くまで授業が行われ、日本の現状にあった放課後の取り組みとはかけ離れており、期待できない。ゆえに、マニラ近郊の私立学校における実践を調査した。

原則的に、こちらでは教師は授業を教え、学力の向上を図ることに重点を置き、生徒指導・放課後の活動には教師と違う別の教員が行っている。特に放課後の活動は、文化、スポーツ両面において、学校以外の専門団体や企業が運営するクラブチームが学校施設を借りるという形で行われているケースも多い。従って、クラブの時間になると学校外からもいろいろな人が集まる。学校就学前の幼児から高校生までが1つのクラブで一緒に活動する光景も見られる。この場合、多くは建物の管理は学校で行い、場所をクラブチームに提供している。クラブチームは、使用するいろいろな道具や備品等の充実を行っている場合が多い。学校の授業時間には、このクラブチームが揃えた道具や備品を借用して、学校側が授業を行う。（授業に人数分必要なものは、学校負担。専門的なものは、クラブチームが保管し、授業の生徒には貸し出ししない。）従って、実際に見学した体操クラブの施設は非常に充実していた。専門的な用具が揃っており、床全体にはマットが貼ってある。日本の小学校のクラブ活動や中学校の部活動とは比べものにならないくらい充実したものであった。クラブに参加する他の学校の児童や生徒が集まってくる放課後は、校内の不審者対策として、首からIDカードを下げ、ガードマンがいる学校の門を通ることにより全クラブの児童生徒を確認していた。また、小さな子どもには、親や関係者が必ず付き添い送り迎えをすることで安全に配慮している。入部時に契約したことに違反した場合は、速やかに退部となる。日本で考えると厳しいと思われがちであるが、こちらの国では安全であることが最優先されるため、安全上での厳しさは逆に安心感となって人々に受け取られる。また、クラブが大会や発表会に出場し、良い評価を得ることがクラブの運営に大きく関わってくるので指導者は基本的なものから専門的なものまで指導できる高度な技術を所有した者があまっている。

4. フィリピンの学生からみた日本とこれからの日本に対する期待

この3年間に、フィリピンの幼稚園から大学までいろいろな学習施設を訪問し、可能な限り、現地の関係者にインタビューを行った。日本に対しての関心度はアメリカに続いて高く、特に将来の海外就労先として日本を意識し日本語を学習する学生も大変多い。フィリピンの大学で教鞭を執る教授たちも、日本に留学して日本語を話すことができる人が多い。さらには日本の大学などで長年研究を重ね、日本の歴史・経済・文化などで大変詳しい知識を持っている人も多い。そのことを学んだ学生たちも日本に対して知識が豊富で、日本の現状や世界の動向に明るい。将来、海外でより収入の高い働き口を念頭に、海外に目を向けながら自分がどのように学習していけばよいかを考えている学生が多い。学生たちにインタビューを行った結果、彼等の多くが「家族のため、良い暮らしができるため」に学問をするという答えで、自分の得意な技術・技能を深めて、将来的には海外で働きたいという意見が多かった。この状況が海外への知識の流出になっていることは否めないが、最終的に自分の国のリーダー

一として国に貢献するという意識の高さは見逃せない。日本の「自分な好きなこと・得意なこと」を深め、自分のため「自己実現」をしていく進路選択と大きく食い違っている。しかし、自分自身のためというより家族のためということで、途中、困難なことがあっても挫折する学生は少なく、学習に対する態度も真剣なものがある。彼等が日本に求めるものは、高額な給料だけでなく、治安の良さと世界の情報が集まる場所、アジアのリーダーとして安定した社会の中で自分を活かせる環境であった。特にミンダナオ国際大学では、講義におじゃましたとき、学生たちと日本語でディスカッションする時間が設けられていた。その中で、自分の能力を発揮しながら高い技術を学習できる場として、期待とあこがれをもって日本をみている現状があった。彼等と話を交わしていると、しばらく日本で働いて実績と経験を積んだ後、自国に帰り指導者として技術を伝えていきたいと云う希望をもっている人が多かった。この傾向は、ここフィリピンだけでなくアジアの国々の若者が日本での就労を希望している内容に沿っているものと思われる。今後、日本人の高齢化・少子化が続いていくと、労働力の不足に伴い多くのアジアの国々の若者が日本で就労する機会も今まで以上に多くなってくだろう。

ともすると欧米に目を向けがちな日本ではあるが、アジア諸国の若者たちが日本にあこがれてくれているうちに我々日本人はアジアを見つめなければならぬと感じた。日本がアジアのリーダーとしてさらに力を発揮するためには、多くのアジア人たちと接し、アジア人として共通理解できる場を多く育んでいくことが大切と思いを深めた。

〔赴任中訪問校〕

- ・私立インターナショナルモンテソーリ幼稚園
- ・公立サンオーガスティン小学校
- ・私立ブレント・ラグーナ校（小～高等学校）
- ・私立サンオーガスティン校（小～大学）
- ・ミンダナオ国際大学
- ・フィリピン大学